

(続紙 1)

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	谷口（藤本） 麻起子
論文題目	摂食障害の人の在り方に関する心理臨床学的研究		
(論文内容の要旨)			
本論文のテーマとなった摂食障害の治療においては、最近では遺伝子や神経伝達物質といった身体の微細なレベルでの摂食障害研究が広がり、食行動の改善を目的とした認知行動療法が主流となりつつある。いわゆる無意識を扱うような心理療法は少なくなっている。これに対して本論文は、無意識からの表現をもとにクライアントの在り方に付き添っていくという臨床心理学の意義をふまえて、摂食障害の人の「無意識の世界とはどのようなものか」、「在り方はどのようなものか」、「心理的テーマはなんであるか」を検討することを目的としたものである。「第1部 摂食障害研究の概観と本研究の視点」では、摂食障害研究の歴史的なレビューと現状の報告がなされるなかで、摂食障害患者に焦点を当て、その無意識を含む心性を分析するという本論文の方向性が提示され、さらに細かな視点としては、先行研究から、診断の変遷の問題、自己・身体・女性性への不信感、文化との関連が挙げられた。 「第2部 調査研究」では摂食障害の人に行った調査研究の結果が検討された。摂食障害の人の無意識にアプローチする方法としては、TATとバウム・テストが主に用いられた。それは摂食障害に関しては、投影法を用いた先行研究が少なく、特にTATは有意義であると考えられながらも、世界的にも研究例が非常に少ないためであった。 TATによる結果は、主観的な解釈に客観性を与える、グランデッドセオリーによって分析された。TAT図版1の検討から他者主体的なあり方、不安全感と自信のなさとの有無が摂食障害の人に多いことが実証された。症状と在り方との明確な対応はなかったが、症状によって希薄な主体を守ろうとする、希薄でない主体という逆説的な在り方が考えられた。 次にTAT図版19を用いて、症状による守りの様相が検討された。その結果、摂食障害の人には守りのイメージあるいは守りの機能が薄いこと、守ろうとしている内的世界が深刻に傷ついていることなどが推測され、症状というのが真の守りになり得ないことが考えられた。守りの在り方と病態水準との関連が示唆されたことから、症状の違いよりも防衛機制や病態水準をみていくことが治療的ではないかということが論じられた。 さらに内的世界の傷つきについて、TAT図版3BMを検討した結果、他者イメージに振り回されて混乱している様相、受容したり養ったりするといった女性性が生きられていないことなどが推測され、自分が生きられていないという心理的テーマが考えられた。 摂食障害の人のバウム・テストについては、いくつかの分析項目でチェックした後で、それをクラスター分析にかけることによって、2つのタイプが抽出された。1つは、小さくまとまった、固い、破綻のない木が描かれているもので、不確実感を隠し、外見を取り繕うことにエネルギーを注いでいる「統制型」と名づけられた。もう1つは、ぼんやりと大きく、樹冠が閉じきっていない木が描かれているもので、境界も内部も不確かで、衝動に突き動かされている「拡散型」と名づけられた。これら2つのタイプと症状との対応はなかったが、2つのタイプのバウムが連続的で、共に本質的には無力さを抱えて上昇を志向していると考えられたことから、拒食と過食とい			

うのは、無力さに対する両極端の在り方で、移行的なものと推察された。また病態水準も統制型は神経症水準、統制型は境界例水準と考えられたが、2つのタイプが移行的であることをふまえば、明確な線引きはできないものではないかということが考察された。

次にTATとバウム・テストを6ヶ月後に再検査した結果から、症状と在り方との変化には大きな関連があることや、心理的テーマは容易に変わらないほど深いものであることが考えられた。これらのことから治療は直線的ではなく多層的で、症状や在り方を「変える」のではなく「変わる」ことを考える心理療法の可能性について述べられた。また

「第3部 事例研究」では、親しくしていた男の子がいなくなったという、親密な関係性の喪失を背景にものを食べることが困難になった4歳女兒とのプレイセラピーの事例が検討された。親密な存在の基盤を確かにしていくこと、母子融合の一体的世界を体験して個として分離していくことが、プレイセラピーの中で展開されていくことが考察された。すなわち、目にみえるかたちで存在を残す遊び、目にみえないけれども存在が実感される遊びを通して、確固とした存在基盤をクライアントが得ていったものと考えられた。また存在の問題に取り組めたことには、プレイルームがクライアントの場所として守られていたことが重要な要素の1つとしてあることが述べられた。さらに現実においていい子だったクライアントが困らせる子になったり、砂山作りをしたりしながら「良いもの－悪いもの」の統合の課題に取り組んでいた過程が考察された。

「第4部 総合考察」では第2部、第3部で得られた結果と考察から、摂食障害の人の心理的テーマ及び在り方について総括がなされ、第1部で挙げた問題に対しての考えがまとめられた。摂食障害の人の無意識からは、生きられていない自分を生きるという問題が訴えられていると考えられた。そして摂食障害の人の自己不信というのは個としての自分が生きられていないことと関連していること、身体を通じて存在の基盤となる一体的世界が求められているということ、西洋文化で失われている女性性の側面を摂食障害が突きつけていることが論じられた。さらにユング派から自己愛理論を展開しているJacoby, M. の楽園幻想論をもとに、摂食障害の人は、自己の不確実さや葛藤を生きることを求める無意識とつながれず、これらの問題を全て解決して自分が受け容れられるというイメージの一体的世界を求めていることが考えられた。

最後に治療においては症状と共に、無意識の世界に沿っていくということも重要であり、そのための専門性を備えた臨床心理士が貢献しうることについて述べられた。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

摂食障害には、主に拒食 (Anorexia Nervosa) と過食 (Bulimia nervosa) という症状がある。しかし本論文は、症状だけでなく、症状を抱える人、さらにはその人のこころのあり方を検討しようとしたものである。臨床的にも、拒食、過食という症状にかかわらず、共通するパーソナリティーが存在することが言われており、症状だけにこだわるのではなくて、その心性にアプローチした本論文の取り組み方は高く評価できる。また心性の方から捉えていくという発想は、たとえばバウム・テストの分析についても生かされている。つまり、摂食障害の人についても、どのような症状を持っている人が、バウム・テストにおいてどのような結果を示しているかを比べていくのではなくて、描かれたバウム・テストの特徴を全体として分析することから、二つのタイプを抽出している。心性から考えることで、摂食障害の本質に迫りうるし、また逆に症状の共通性と変化についての意味の理解が可能になったと思われる。

本論文は、摂食障害を抱える患者の無意識に焦点を当てようとしたために、主にTATとバウム・テストという投影法による研究になっている。投影法の結果の分析に関しては、セラピストや実験者の経験や主観的な見方に左右されるところが大きい。そのために科学的な論文という枠組みにのせることがむずかしくなる。しかし本論文では、主観的な分析を重視しつつも、それに客観性を与えようという工夫がなされている。しかもその際の手法も、単純な統計的比較によるのではなくて、TATに関しては主観的解釈を生かした、質的研究におけるグランデッドセオリー、バウム・テストに関してはクラスター分析を用いている。このように主観的な分析に客観性と科学性を付与しようとし、またその方法に工夫がなされているところも、臨床から科学につなごうとしている本研究の評価できるところである。

TATによって生まれてきた、摂食障害の人たちの語りは非常に興味深い。これも適切な投影法を方法として選んだことにもよって、見えてきたものであると言えよう。TATの結果には、極端な万能感と自信のなさの共在、内部というもののなさ、他者の不在、親などを否定しながらもそれを貫けないことなど、摂食障害の人の無意識的なところも含めたこころのあり方が見事に浮き彫りにされている。著者の分析にも納得させられるが、それ以前にTATとい手法を用いようとした判断、それによって集められたデータのすばらしさも、本論文の価値として非常に重要なものであると考えられる。またTATの結果は、摂食障害の人たちの、自分のなさ和他者の不在という特徴が関連していることを推測させる。

バウム・テストの評定結果についてのクラスター分析によると、比較的明瞭に、2つのクラスターが導き出された。小さく固くまとまっていて、破綻のない木と、大きいながらも周囲が閉じられていず、輪郭のあいまいな木として描写できる2つのタイプは、印象としても大きく異なり、摂食障害を単純に一つのイメージでくくっていけないことを示唆している。著者が「統制型」と「拡散型」と呼ぶ2つのタイプを抽出したことも、非常に評価できる、興味深い結果である。これは必ずしも、拒食と過食という症状に対応していなかったが、摂食障害に強迫的な特徴を持ったものと、解離的な特徴を持ったものがあることを考えると、この2つのタイプはそれらの特徴に相応していると考えられ、摂食障害の心性のある種のスペクトルを示すことができたと言えよう。

さらには、樹冠が閉じていないことが、精神病圏を示唆する重要な病態水準のサインとして考えられていることからすると、「統制型」は一応神経症水準に、「開放型」は精神病水準に位置づけられると考えられる。著者が中間の形のものを手がかりに論じているように、摂食障害というのが、2つのタイプの間を往復するような特徴を持っているとすると、病態水準としても神経症と精神病の中間を往復するようなところの構造を持っていることが示唆されており、これも非常に興味深い結果である。

本論文の最後は、親密な関係性の喪失を背景にものを食べることが困難になった4歳の女兒のプレイセラピーによる事例研究である。一般的な摂食障害の発症は思春期以後であり、また本研究での調査が行われた摂食障害の人たちの年齢が、主に20歳代であることからして、調査研究の単純な延長線上でこの事例を捉えることはむずかしいかもしれない。しかしまた逆に、性ということが入っていない年齢での治療例を取り上げることで、基本的なものが見えてきたとも言えるかもしれない。

この事例では、著者も指摘しているように、存在と非存在をめぐっての遊びが非常に興味深い。なくなってしまったものが次回にセラピストによって再現されることによって、クライアントは次第に自分の存在基盤を確かめていけるようになったと思われる。また「内在化」というプロセスも明瞭に見て取れる。

本論文の第2部の調査結果でも示されたように、摂食障害というのが広いスペクトルを持つものだとすると、この4歳女兒の事例は、非常に基盤的なものが問題になっており、それをある意味で修復できたセラピーであったと言えよう。

最後に著者が展開している摂食障害の人たちにおける一体的世界の希求という視点での分析は示唆的であるとともに、それが摂食障害にどの程度当てはまるものなのか、あるいは逆にそれは摂食障害の他の症状や心理的問題についても該当するのか、今後の課題であると考えられた。

試問においては、引用の仕方があいまいで、著者のことばと引用の区別がはっきりしない場合があるという指摘があった。また本研究を通じて捉えられた摂食障害の人たちのあり方を一体的世界の希求ということでもとめあげるのには少し無理があり、その本当に多様なあり方を別の視点から見ていくことができるのではという指摘もあった。しかしこれらの問題点の指摘は、非常に豊かな結果を生み出した本研究のさらなる発展性を視野に入れたものであり、本研究の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成22年 8月 4日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降